

本文批評と解釈

関根 清三

「本文批評と解釈」班代表
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

過去2年間の研究活動

過去2年間に「本文批評と解釈」班は、東京、京都、浜松で6回におよぶ研究会・調整班会議を開催した。発表者と論題は以下のとおりである。

守屋彰夫 東京女子大学教授

「イスラエル学における本文批評と解釈」

吉水清孝 北海道大学助教授

「インド学における本文批評と解釈」

釜谷武志 神戸大学教授

「文学作品の創作方法・享受方法と古典」

金文京 京都大学教授

「大津皇子「臨終一絶」をめぐる諸問題」

岩田孝 早稲田大学教授

「世尊の慈悲 仏教認識論の視点から」

佐藤研 立教大学教授

「新約聖書学と隣接分野」

それぞれの発表の具体的な内容については、『第Ⅰ期研究成果報告』等に詳しく記載されているので、ここでは割愛し、それを通して我々の班の研究課題である「本文批評と解釈」についてどのような知見が開けて来たか、一般的な概括に絞って以下に報告することとしたい。

「本文批評と解釈」の研究状況

古典の本文は、しばしば複雑な伝承の過程を経ており、それを解釈するにあたって、まず元来の形を確定する必要がある。音韻、韻律、語形、語彙、構文、技法、体系等の精査を通して、その確定が試みられる。

本調整班の基礎的な課題は、こうしたいわゆる【**本文批評**】の実際と理論についての研究であるが、2年間の共同研究によって、研究分野ごとの偏差が確認された。例えば写本の系統が多様な研究分野では、それらの比較研究が必須であるし、刊行本文が比較的新しく、古い各種古代語訳を擁する分野では、それらとの比較が重要となる、等々。こうしたそれぞれの分野ごとに適した方法を駆使して元来の本文を確定することが、本文批評の課題となるが、これは必ずしも解釈と截然と分けて遂行されるとは限らず、解釈との絡みにおいて逆に本文批評が確定されて行く場合もあり得る。いずれにせよ本文批評は、広義の解釈の基底層を形成することとなる。

さて次に個々の本文の主題・文体・歴史的背景等の検討により、より大きな本文複合体の連関の中で、個々の単元を確定する必要がある。それが【**文学批評**】の段階となる。これも分野によって、はっきりした単元分けが済んでいる刊行テキストを擁する場合には簡単であり、そうでない場合は諸説紛々となるなど、偏差が見られることは当然である。

以上は文書伝承をめぐる研究だが、古典の本文はしばしば文書として形成される前に、長い口伝伝承の段階を経ている場合が多い。その口伝伝承の諸段階を明らかにし、その際に働く歴史的諸要因や叙述意図について考察するのが、【**伝承史**】的研究となる。

この口伝の伝承史を文書の伝承史領域へ継承したものが、続いて【**編集史**】的研究となる。本文の、文書としての第一段階から、加筆による補足注釈作業を経て、現在伝えられる最終本文に至る歴史を跡付け、そこでの編集意図を問うことが、編集史の主たる任務である。ここでも口伝伝承がどの程度想定され、また再構成可能かについては、更には編集者の働きがどの程度活発かについては、研究分野によって様々なようである。

さて古代の作者・編集者は、彼らが生きていた集団の固有の生活の座（Sitz im Leben）に伝えられる文学類型にのっとって語りまた書いたというのが、【**様式史**】的な視点だが、様式史は自らの視点の妥当性を

証明するために、出来る限り広汎に種々の本文を比較渉猟し、そこに共通する類型の収集と、そこに想定される有効な生活の座の確定をしなければならない。また集団より個人の書き手の特性を重視する分野では、そもそも様式史的研究は市民権を得ていない。

様式史を是認すると否とにかかわらず、本文の作者・編集者、更には伝承者・改竄者等が、精神的・思想的環境を陰に陽に前提としていることは、確かであろう。彼らが前提とした、そうした環境を伝統と総称し、彼らがどういう伝統の中に生き、語の固有の場を踏まえて、本文を形成していったか、それを研究するのが、【**伝統史**】的研究に外ならない。

以上の様々な解釈学の方法論を統合的に駆使して、本文の【**歴史的意味規定としての解釈**】に至ることが、本文解釈のさしあたっての目標であり、そのそれぞれの理論と実際について、各分野の研究報告と討論によって総合的な知見を開くことが、我々の共同研究の主たる課題となる。実際それぞれの分野の最新の成果と独自性を学び合うことによって、各分野ごとの研究にも新たな刺激と視点を得つつある。

しかし以上のいわゆる【**史学的批判的解釈学**】の方向の研究成果を出し合うことは、或る学問的客観性を保持するためにも、共同研究の基本として妥当であったが、近年の解釈学ではこれに根本的な疑義を呈したもう一つの方向もあることに留意し、今後はこちらの研究成果も自覚的に出し合って行きたいと考えている。すなわち地平の融合・解釈の葛藤を旨とする【**哲学的解釈学**】である。こちらの方向では、匿名の解釈者が一般的な方法にのっかって、本文の客観的な歴史的意味規定をすることなど、そもそも不可能であると考えられる。むしろ解釈者は一定の主観的な先入見をもって本文に対さざるを得ず、そうした解釈者の地平と本文の地平の葛藤、対話、あるいは融合といった過程こそが、解釈の作業に外ならない。そこでは個々の解釈者の主観的な地平が、先ず自覚的に明化される必要があり、それと本文とのせめぎあいの過程が追求され、その都度【**解釈者の思想とからみあった意味での思想的な意味規定としての解釈**】が目指されねばならない。この点の探求は、従来の古典学ではしばしば等閑に付されがちだったが、本調整班研究はこちらの解釈学の理論と実際についても積極的に取り上げて行きたいと思う。

さて解釈学のこうした二つの方向は、必ずしも敵対反目するものではなく、むしろ【**相補的な関係**】を築くべきものであろう。哲学的解釈学はできる限り客観的な史学的解釈学の成果を取り入れなければ、単に独善と偏見に墮する場合があります。逆に史学的解釈学は、哲学的解釈学の方向を加味して解釈者の主体的地平を吟味することをしなければ、ただ思想的な無反省と研究意

義をめぐる無責任に陥る危険がある。両方の解釈学は、では具体的にはどのような均衡にあって互いに裨益し得るのか、われわれの共同研究は最終的にはそうした点まで総合的に問うことを課題とすることとなる。

3・4年目に向けて

過去2年間は、それぞれの分野の研究状況がどうなっているのか、主として個別研究の発表と質疑を積み重ねて来て、それだけで非常に有益であったというのが、多くのメンバーの共有する感想である。それぞれの個別領域に閉じこもりがちだった関心の窓が自ずと開かれるのであるから、様々な知見を与えられ刺激を受け、しばしば学興の時を持たたことは幸いであったと思う。またそもそも共同研究の出発点として、他分野の事情について知るところから始めることは当然のことであった。しかし今後はそうした受信から発信へと少しずつ転じて、例えば基調講演で吉田民人教授がいみじくも指摘されたように、タックスペイヤーへのアカウントビリティを果たして行くことも自覚的に課題としたいと思う。

上に述べた、【**解釈の理論と技法をめぐる方法論的反省**】だけでなく、吉田教授が提案されたように、バテシェバ事件ならバテシェバ事件といった【**共通のテキストについて各分野の研究者はどう読むのか**】様々なテキストについて比較研究をしてみることも面白いだろうし、あるいは吉田教授の言われる幸福とは、またフロアーから指摘された憎しみと癒しとは、また以前から総括班会議等で提案されていたように、愛とは、正義とは、悪とは、信とは、知とは、更には責任、自由、人格、生命、環境等々とは、各分野でどう考えられて来たのか、こうした【**古典の鍵語**】であり且つ【**現代人の思索に挑む問題系**】を意識して、各古典がそれらについて何を語り、現代に如何なる示唆を与え得るのか、相互に批判的に共同の検討して行くことも、きわめて有意義な課題となる。そしてそれらの成果をこのニューズレター、古典学叢書、翻訳シリーズ等の媒体を通して積極的に発表し、社会に還元して行くこともより頻繁に試みたい。

調整班の活動についての概括的な報告は以上に留める。以下では、こうした今後の課題をも陰に陽に視野に収めてではあるけれども、一先ずこの2年間の総括として、この調整班に集う3つの研究分野、イスラエル学、中国学、インド学がそれぞれ「本文批評と解釈」についてどのような研究を遂行しているのか、その具体的なサンプルを呈示することをもって、実質的な研究報告としたい。